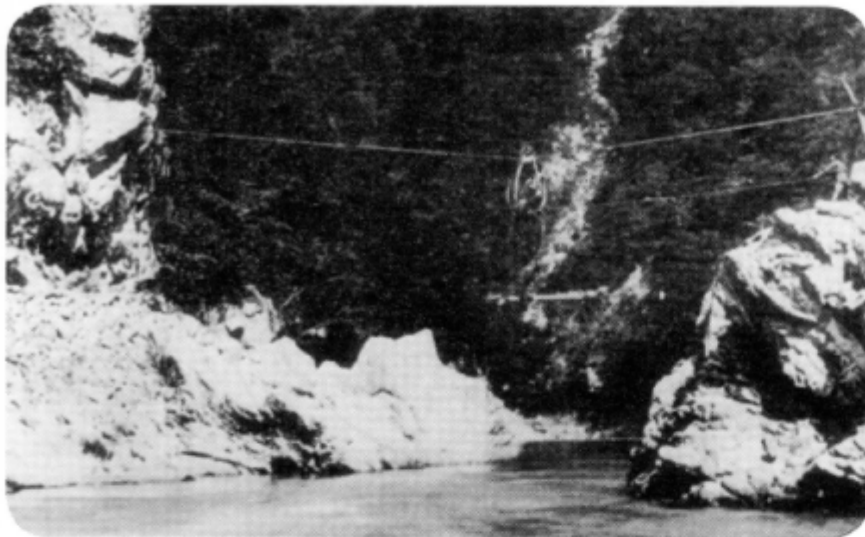


この地藏堂跡から下へ二、三〇〇メートル進む。この間に四体の石仏（うち一体は役の行者像）があり、土や枯葉を除き草花をたむける。その先から西漆山へは「七つ野魔」といわれる程の難所で通行できない。雪崩の多発地帯で、安政の大地震で崩れたといわれ、その大崩落跡が今も生々しく残っている。

○「屋敷跡」 福森さん語る



餅ヶ淵の籠の渡し 町史編纂室蔵

地藏堂の手前（上手）に、福森さんの屋敷や田の跡がある。浜松市在住の福森昭雄さんは、

「家は牛方の泊まり宿で、宿の看板があつた。搦き屋があり、水は川に流れ落ちていた。そこには、ワイヤー張りの橋があつた。祖父の話ではモズモ谷の奥に落武者（木地師か？）がいた。父

はその場所へ連れていってくれた」と語る。

地藏堂の下の「餅ヶ淵」にかつて籠の渡し（上の写真）が懸けられ、昭和四十年頃、神岡線の鉄橋ができるまで使われていたという。現在も籠の渡しと釣橋へ通ずる道跡や橋台の跡を見ることが出来る。

(2) 街道と道祖神（字栃平？）



道祖神

一旦、車で西漆山集落へ移動、地元の方義信さんの案内で集落から割石方面への道をさかのぼる。

集落の中央あたりから一番奥の家あたりで、舗装が

途切れる。以降、舗装のされていない幅二・三メートルの道が、曲り谷まで一キロメートルほど屈曲しながら続いている。この道は、戦後旧道の上に新たに作られたと下方信義さんの説明である。歩き初めて一〇〇メートル程で左側に「サヘノカミ」の石仏と出会う。兄妹婚の道祖神で、好配偶者に恵まれない山間僻地の近親相姦の戒めをこめたものと伝えられている。この言い伝えのように集落の人々、とりわけ庶民の信仰の神として祀られた

ものであろう。

(3) 今も残る旧道

「サヘノカミ」の石仏から右上手に約三〇メートル、その山側に弧を描くように旧道が残っている。畠へ行くため利用されているが、ほとんど草に覆われ地元の人でないと確認することは出来ない。

中街道筋に新道を作った時、ここだけ山側に迂回していたため残ったらしい。道幅は約一メートル位。所々にほんの少し残っている。昔の面影はない。二〇分ほど杉木立、雑木林を歩くと曲り谷についた。

(4) 休み場といわれる場所(字休み)



休み場図(字絵図中)

曲り谷をおりる手前に「休み(やすんば)」という地があつた。字名が字絵図に載っているの、この辺りだろうと確認したが特定できなかった。「元禄検地水帳」にも出てくるので、当時から確かにあつたと思われる。それにしても何故



不動滝

このような字名が付けられたのであろうか。推測ではあるが、急峻険峴な街道の中、此処で清冽な谷川の水で喉をうるおしたのか。そして人牛とも体を休め、英気を取り戻し、夫々の目的地に向かったのだらう。「砂漠の中のオアシス」的な場所だったと思われる。往来する人々の「お休み処」「情報交換」の場だったのだらうか。そう考えればこの名のついたのも理解できる。

(5) 不動滝へ(字標木谷)

旧街道はここから谷川へと下り、おそらく丸太を組み合わせた程度の木橋を渡ったのだらう。安政の大地震で崩落した「七つ野魔」、色変わり地蔵、「袖引地